

発表者 リヴィーン 貴子

テーマ 「一人ひとりのニーズに対応した多様な学び方について」

リヴィーン貴子と申します。貴重なお時間をいただき、ありがとうございます。

一人ひとりのニーズに対応した多様な学び方を促すために大切なことは、教師や指導員及び学校の積極的な取組と、学習者や家族、学校、地域間の効果的な連携と思います。

では、積極的な取組とは。まず、面談やアンケートで学習者のニーズを調べ、分析します。具体的には、学習の目的と動機、レベル、勉強時間や使用機器などの学習環境、個別レッスン、クラス授業といった学習スタイルの希望、不得意分野、外国人学習者の場合は文化的、宗教的背景からのニーズ、例えば授業を受けられない日時や曜日、教師の性別の希望などです。

学習が始まってからも継続的に面談し、問題点を発見、改善方法とともに考えます。これにより、教師が寄り添ってくれているという安心感と自信が学習者に芽生え、信頼関係が築かれます。また、目標やレベルに変化が生じているか定期的に確認し、必要があれば学習内容やクラスを調整します。対話形式や協働作業、体験学習なども取り入れると、学習者のアウトプットが多くなり、観察しやすくなります。

以上の3つに加え、状況次第で、より臨機応変な学習支援も必要となるかもしれません。1つの例をエピソードで紹介いたします。

私は、日本の名古屋大学で言語学、イギリスの大学院と職業教育機関で教育学と英語教授法を学んだ後、現地のシティカウンスルで英語教師補助員、帰国後は日本語、英語などの語学教育と、日本語教師養成に携わってまいりました。イギリスのシティカウンスルに在籍中、ある女性、仮にアイラと呼びましょう、から10歳になる息子さん、こちらはロリー君と呼びます、について相談を受けました。ロリー君は学習のペースがほかの子より遅いため、授業についてゆけず、テストの回答も白紙が目立つ状況。可能な限り特別支援学級ではなく、皆と同じ環境で学ばせたいが、何かよい方法はないかというものでした。「ロリー君の得意なことは？」と尋ねると、「落書き」。確かにテストの解答用紙にも鉛筆でとてもきれいなお花の絵が描かれており、その横に担任の先生から「すてき」というコメントも添えられていました。

この先生の粋な姿勢もヒントとなり、彼の絵をトピックにしてテストに関連した質問を解答用紙に書いて渡してみることにしました。例えば、英語のつづりのテストに描かれていたお花の横に「What colour is this flower? (このお花は何色?)」と書いて渡すと、ロリー君はその絵に鉛筆で様々な濃淡をつけて、「There are more than ten colours, red, green, yellow…

(10色以上あるんだよ、赤、緑、黄色、、、)」

算数のテストでは、大きなアメの落書きの横に、「このアメを3個ずつ5人の友達にあげるとしたらアメは全部で何個要るかな」。ロリー君は5個のかわいい手下げ袋と、その中に3個ずつアメを描いて「15」と回答。予想外の答えも多く、彼の想像力に感心しました。

2年後、アイラにロリー君の近況を訪ねてみると、まだ2人で落書きを使って学習を続けていてくれて、以前よりも授業についていけるようになったと。それだけでなく、絵の才能が顕著になり、本格的にデッサンのスクールに通い出した。「得意なことで苦手を克服しただけでなく、同時にその得意なことにも上達したわ」と大変うれしそうでした。

落書きを否定的でなく、ロリー君の才能と捉えていた担任教師や、学校の環境も含め、この件は発想の転換や、臨機応変な学習支援が成果を生み出し得ることを教えてくれました。

さきに挙げた学習者や家族、学校、地域間の効果的な連携は、本日のもう1つのテーマとつながりますね。ポイントは、連携ネットワークを築き、相互で事案を想定し、具体的な対応の手順を共有することや、問題が生じた際には、即、解決への行動に移すことと思います。

実は私自身、イギリスの大学と地元の教育機関との速やかな連携によって、問題解決の恩恵を受けた経験がございます。学校と地域社会がバリアフリーで人材育成に励む場面に遭遇した貴重な体験でした。この後、お時間がございましたら、お話しさせていただきます。

まとめますと、一人ひとりのニーズに対応した多様な学び方を促す上で重要なことは、正しくニーズを把握し、自信と安心感を与え、積極的に学べる環境をつくる。目標やレベルの変化に継続的に対応しながら、臨機応変な学習支援をする。加えて、学習者や家族、学校、地域で効果的に連携する。

以上です。ありがとうございました。

区 長 どうもありがとうございました。プレゼンと別の内容になってしまうのですが、イギリスに行かれて、日本でも日本語を今教えられているという、これ決定的に教え方が違うのですか。今のイギリスの先生が、絵のエピソードで気づいたことと、日本の教員というのはそういう訓練を受けているかということ、そんなに受けていないと思うのですけれども。それは教員の育成プログラムが全然違うということですか。

リヴィーン 科目や学校によるとと思いますが、語学教育に関して申し上げますと、似ています。近年の日本の英語教育が英国、米国など欧米

の外国語教授法を取り入れていることも要因かと。今、15歳の姪っ子に週2回英語の個人レッスンをしておりまして、一緒に公立中学の教科書を復習していますが、取り上げるトピックですとか、内容、構成・教授手順など、かなり英米での外国人対象の英語教育と似ていると思います。

区 長 それは、日本の英語教育って、すごく時間をかけてもなかなか話せないとか、聞き取れないとかということになっているではないですか。その反省をもとに、内容が今変わってきているということなのですか。

リヴィーン そうですね。以前と比べますと、テキストもかなり変わってきていて、日常生活に関する友人との会話、店や駅での対話など、実用的な内容が増えています。題材は良いので、聞き取る力を伸ばすように活用することも可能だと思います。例えば、習得目標の語句や連結して発音するフレーズ（”Can I” “look around” など）の音を聞いたら、すぐにその意味と結びつけられるようになる練習を増やすなど。ただ、中学英語の後半、環境問題や社会問題といった客体中心で抽象的な内容が増え、非常に難しくなることは、見直し得る点かと。英語を母語として日常で使用していたり、幼少期から頻繁に学んでいる10代前半の学生であれば、有意義に習得できるかもしれませんが、日本の普通教育のカリキュラムで学ぶ中学生にとっては、日常生活での英語の実践力が固まっていない状態で、抽象的な内容を読解したり意見発表したりするため、英語が過剰に難しく感じ、苦手意識や学習の諦めの原因になるかもしれません。私見を申し上げれば、中学英語では、主体中心・具象的な内容と、聞く話す中心の学びで基礎固め、高校生～大学1～2年生で今のような抽象的な内容を増やし、専門的で幅広い英語力養成に重点をおくという流れでも、英語教育のペースとして全く遅くないと思います。

区 長 プレゼンと別の内容になってしまいましたけれども。あまり時間がなくなってしまった。プレゼン自体は、英語の話とそっちの話かと思ったのですけれども、割と学習のプロセスの話だったので、よく分かりました。

区 長 イギリスの教育はより自由ですか。

リヴィーン 個人的には、わがままや自分勝手な態度には厳しく接し、臨機
応変なところとはっきり線を引いているという印象を持っています。